

京師南奥実験学校小6 体育授業の考察

学校経営コース U23C219J 宮本 裕介

1. はじめに

新潟大学創生学部報告書(2023年)によると、北京師範大学は、北京市海淀区にある中国教育部直属の国家重点大学で、教育学を主体に文理を併せ持つ総合大学である。1902年に創設された、100年以上の歴史をもち、中国大学ランキングでは常にベスト10に入る超エリート大学であり、師範系では中国のトップ大学とされる。また、毛沢東や鄧小平、江沢民、胡錦濤といった新中国歴代の最高指導者すべてがここに視察を行っており、学生数は2万人で、教職員が3000人在籍している。2002年9月1日に開校した京師南奥実験学校は、中国奥園地産集団が投資を行い、北京師範大学が全面管理を行う、9年一貫制教育を行う新しい形の学校であり、北京師範大学珠海分校における基礎教育(義務教育)改革の実験(実践)を行う学校である。

新潟大学教職大学院では、これまでの学部間交流の歴史を受けて、大学院間により深い交流に発展させている。新型ウィルス流行により、4年間直接の交流が中断していたが、2023年秋に交流が再開した。私は訪中時に京師南奥実験学校体育授業の実践に取り組む機会を得た。



2. 授業内容

① 単元名 「古塩体操と宮フープで心と体を解放」

② 本時のねらい

運動に積極的に取り組み、ルールを守り助け合って運動したり、勝敗を受け入れたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようにする。

③ 本時の構想

本時は前半にウォーミングアップとして、日本の伝統的な体操であるラジオ体操を行い、体をリラックスさせ、ねらいに迫る。後半はフラフープを使って個人の動きから集団の動きへと変化させる中で、自分の体への気づきと集団で動きを合わせたり、作りあげたりする活動を行う。

④ 展開

I ラジオ体操

II フラフープ

3. 考察

小学6年生のクラスで、体育の授業を行った。ラジオ体操とフラフープを中心とする授業展開である。子どもたちは意欲的で、言語は通じなくても一生懸命運動する姿に感動した。ラジオ体操は、「Radio gymnastics follow me.」の掛け声の下、一緒に日本のラジオ体操で体をほぐし、また楽しむことができた。その後、「呼拉圈 follow me.」という掛け声でフラフープを使って運動をした。最初は、体の部位一か所を使って回した。首や足首や腕等を使ってフラフープを比較的簡単に操っていた。次にスピンをかけて、投げた位置に戻ってくるよう促すと楽しみながら活動していた。少しずつ距離を伸ばしていくなど工夫して楽しむ様子も見られた。2人組になってキャッチボールをしたり、場所を入れ替えたりする活動を通して歓声を上げながら運動に浸る姿も多く見られるようになった。最後にチーム分かれて一人が転がし、残りの子どもたちは一直線に並び転がってきたフープを飛び越えるという難易度の高い技にチャレンジした。日本の児童の反応と同じく、協力して達成しようとする姿が見られた。日本でも中国でも体育を通じた児童の反応は同じで、体と心を解放して楽しむ姿に心を打たれた。



4. おわりに

私たちが訪中でできたのは、サポートメンバーの存在なしには成し得ないことだ。現代社会文化研究科院生のチャスナさんは、最後の最後まで指導案や発表資料の翻訳に尽力してくれた。膨大な資料を翻訳するのは大変だったはずだ。新潟市立上所小学校在籍の五十嵐さんや創生学部大学院生の周さんも手伝ってくださった。改めて、感謝申し上げます。

また、陳さんや周さんは現地での通訳を行ってくれた。授業はもちろん、会話、土産の購入に至るまで面倒を見てくれた。

さらに周さんには、バスの手配や車の配車、全日程の管理にいたるまでありとあらゆる面で助けてもらった。彼、彼女らをこのように動かす原動力はいったい何だろうか。

中国の方や中国という国、これまでの印象とは全く違うものとなった。現地に行き、現地の空気に触れ、人や物に五感を通して出会うことの大切さを学ぶことができた。オンラインで何でもできる時代だからこそ、こうして実際に現地に赴くことを大切にしたい。

